

## 自己評価報告書(最終報告)

報告者

予防教育センター  
／内田 香奈子

## ■平成23年度の目標に対する自己点検・評価

## Ⅰ. 学長の定める重点目標

## Ⅰ-1. 教育大学教員としての授業実践

本学の目的は、豊かな教養と教育実践力をもった教員を養成し、学校現場に送り出すことにある。このことを実現するには、教科専門・教科教育・教職専門等の各分野の授業が、学校現場の実践と関連性が保たれていることが必要である。あなたは、教員養成大学の教員として、本年度はどのような授業計画を立て実現しようとするのか、これまでの取り組み状況を総括し、具体的に示して欲しい。

## 1. 目標・計画

昨年度は、今年度より大学院において開講する「予防教育科学」の授業内容を高めるため、予防教育プログラムの開発と実施に従事し、一定の成果を得ることが出来た。今年度は昨年度の成果を元に、以下のことを目標とした授業を構成したい。①教育の背景にある理論について、理解を深めることが出来る。②予防教育を構築するための知識や技術を習得出来る。③予防教育を現場で実践するための技術を習得出来る。以上の目標を達成するための授業を構成し、理論と実践の両面から現場の教育を構成・実践できる教育者の育成を行いたい。そのため、授業方法については講義、ディベート、グループワークなど、様々な方法を用いたい。そして、成績評価についても、相対的な評価ではなく、本人の努力や意欲等が反映される形の質的な評価を目指したい。

## 2. 点検・評価

今年度は10月より大学院において開講された「予防教育科学」の授業について、次の3点から構成することを目指した。①教育の背景にある理論について、理解を深めることが出来る。②予防教育を構築するための知識や技術を習得出来る。③予防教育を現場で実践するための技術を習得出来る。そこで、授業構成を理論編と実践編に分けて講義を行った。理論面では心理学などの知識をパワーポイントスライドなどを用い、わかりやすく講義することにつとめた。また、講義内容をより充実させるため、研究成果を学内紀要にまとめた。実践面では、学生を児童・生徒に見立て、模擬授業を行うことで体験型の講義を行った。理論と実践を交互に行うことで、たとえば理論面の講義時間に理解が十分でない学生にも実践を通して理解することができるなど、様々な学生をフォローしやすい環境をつくることができた。なお、成績評価については、レポートでの成績評価のみならず、講義中の積極性なども加味し、多角的に評価を行った。

## Ⅱ. 分野別

## Ⅱ-1. 教育・学生生活支援

## 1. 目標・計画

昨年度は、プログラム開発に携わるアルバイト学生との交流を通して、学生の様々なニーズを探った。その結果、予防教育にかかわる様々な体験を希望していることが分かった。そこで、実際に附属小学校における予防教育授業への参加を通じて、将来、現場で役立つ体験をしてもらうことができた。また、国内・国際会議への参加を通じ、学生と国内外の研究者との交流を持ってもらうことが出来た。本年度は、上記のような取り組みに加え、授業での交流を通じ、より様々なニーズを持つ学生の要望をさぐり、授業などに反映させたい。また、すべての支援を通じ、社会において必要となる礼儀作法等の指導を行いたい。

## 2. 点検・評価

まず、昨年度と同様に、プログラム開発に携わるアルバイト学生を附属小・中学校での予防教育授業に参加させた。これにより、将来の現場で役立つ体験をさせることができた。また、大学院の講義開始前後やアルバイトの学生と触れ合うことで、学生の相談等に応じた。また、すべての支援を通じ、社会において必要となる礼儀作法等の指導を行った。

## Ⅱ-2. 研究

### 1. 目標・計画

昨年度は概算要求事業にかかわる研究を国内外の学会において公表した。また、プログラム構築にかかわる研究成果が、国内外の学会誌に受理、掲載された。本年度は、昨年度と同様に、学会での発表を複数行う予定である。科学研究費補助金「正負感情の相対比と表出抑制が健康と生活満足感に及ぼす影響についての予測・介入研究(研究代表者:山崎勝之)」の連携研究者として、継続研究を行う予定である。

## 2. 点検・評価

6月に渡英し、いじめ予防教育に力を入れるスミス教授の研究室を訪問した。同月に、学校保健研究に感情基礎研究の成果が公刊された。8月には米国で開催された国際学会に共同研究者として参加、発表した。9月には日本心理学会のワークショップやポスター発表を行い、予防教育に関する基礎研究、応用研究それぞれの発表を行った。また、科学研究費補助金「正負感情の相対比と表出抑制が健康と生活満足感に及ぼす影響についての予測・介入研究(研究代表者:山崎勝之)」の連携研究者として、継続研究を実施した。また、3月初旬に、発達心理学会で予防教育に関する自主シンポジウムを企画し、司会を行った。

## Ⅱ-3. 大学運営

### 1. 目標・計画

昨年度は、本学の第2期中期目標の中核の1つである、概算要求事業に邁進し、学校教育に寄与することで、大学への評価向上の点から、本学の運営に貢献する方向を探った。その結果、プログラムの実践に一定の効果をあげることに成功した。本年度は、よりプログラムの開発ならびに実践に邁進することで、大学の評価向上に寄与できればと考えている。

## 2. 点検・評価

本学の第2期中期目標の中核の1つである、概算要求事業に邁進し学校教育に寄与することで、大学への評価向上の点から本学の運営に貢献する方向を探った。その結果、今年度を実施したプログラムは、ほとんどの項目において科学的な成果を確認することができた。以上の点から大学の評価向上に寄与できたものと考えられる。

## Ⅱ-4. 附属学校・社会との連携, 国際交流等

### 1. 目標・計画

昨年同様、附属小・中学校において、概算要求事業に関わる予防教育プログラムを推進し、その教育内容の開発を通して連携を行う予定である。また、県内の小学校においても同様の活動援助を行う予定である。国際交流については、6月にイギリスにおける学会に、8月にアメリカにおける学会に、3月にオーストリアにおける学会に参加し、海外の研究者と交流を図る予定の他、概算要求事業に関わるシンポジウムにおいても国内の研究者と交流する予定である。

### 2. 点検・評価

附属小・中学校との連携では、予防教育プログラムの開発と実践を通じ、連携を図った。社会との連携においては、鳴門市第一小学校において、保護者を対象に生活習慣病予防についての講演を行った。国際交流については、6月に英国の、8月に米国の学会に参加し、海外の研究者と交流を図った。

## Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)